

生物多様性 くまもとCだより

創刊号！

平成29年2月26日発行
発行元：熊本市 環境局環境推進部
環境共生課
TEL.096-328-2352



熊本市は平成28年3月、「熊本市生物多様性戦略～いきもん つながる くまもとCプラン～」を策定しました。

…長い名前ですみません、「Cプラン」と呼んでください。
これは、私たちのまちや暮らしを自然と寄り添いながら、魅力的にしていけるための計画。ただ、「そもそも生物多様性ってなに？」…基礎的なことから、最近の話題までをお届けするため、Cプラン策定から約1年。そう、満を持して！「生物多様性くまもとCだより」を創刊！！だいたい季刊(予定)。よろしくお祈いします。

生物多様性を守り、未来に引き継ぐ。 誕生！みんなのCプラン



熊本市って、どんなまちだと思いますか？
田舎？都会？一たぶん、どちらも正しい。74万人も住み、繁華街も広がっている都市なのに、蛇口をひねればミネラルウォーター！地下水で水をまかなっているし、あちこちに豊かな湧水、街なかにも水辺やみどり。広がる田んぼや、どこか懐かしい里山。広大な干潟は誇るべき海の幸の宝庫。野菜や果物もたくさんとれる！さらに、日本や県内で絶滅が心配されている生きものも少なくないんです。（熊本城の石垣をすみかにしているものも…）これはけっこうすごいことだ！！

そんなくまもとの生物多様性を保全し、将来まで豊かなめぐみを受け続けていくための基本的な計画として「Cプラン」はできました。平成28年3月策定、熊本県内の市町村では初めて（！）の生物多様性の地域戦略です。

Cプランで大切なことは、単に行政のためだけの計画ではなく、自然に関わる活動団体や事業者などの様々な主体、そして市民一人ひとりの行動の指針となる計画だということ。単に「生きもの、自然を守ろう」ではなく、自然とともにある魅力

的なまちづくり、暮らしづくりを目指すもの。熊本で暮らしを営む全ての人に関係することです。

Cプランでは、熊本市にはどんな自然環境があり、生きものがいるのか、暮らしとどう関わっているのか、どんな課題を抱えているのか、について整理しています。そして、「自然のめぐみに感謝し、人と自然がともに生きるまち、くまもとをみんなで実現する」を理念に望ましい将来像を描き、まずは2020年を目標に、具体的な取組やそれぞれの主体の役割などを含めた行動計画をまとめています。

Cプランを踏まえて、すでに、「熊本の自然環境を知る、見守る仕組みづくり」「みんなで連携・協働して取り組む仕組みづくり」など、これからの取組の基盤となる、新たなプロジェクトについても、検討や行動が始まっています。

自然豊かな都市だからこそ、みんなで連携・協働して、保全していく。くまもとの挑戦です！

一さて、最後に問題。「Cプラン」の「C」には、4つの意味があります。一体何でしょうか？

（答えは本編又は概要版で！）

くまもとC 生物多様性 ミニシンポジウム開催！

2月5日、熊本市環境総合センターで「くまもとC生物多様性ミニシンポジウム」が開かれました。Cプランの策定を機に、いろいろな立場、世代間がつながり、取組を広げていくことを目指して開催されたものです。

集まったのは、市内で自然や生きもの、生物多様性に関する活動・研究をしている団体や学校、関係する企業や行政機関など16の団体、総計49名。



↑にぎわうポスターセッション ↑お互いに興味津々

まずは、お互いの活動内容を知ろう！ということで、活動内容を発表するポスターセッションが行われ、活発な質疑がありました。参加した3つの中学・高校の生物部からの発表のレベルの高さへの驚きや、他の団体の活動内容を知るいいきっかけになったという声が聞かれました。

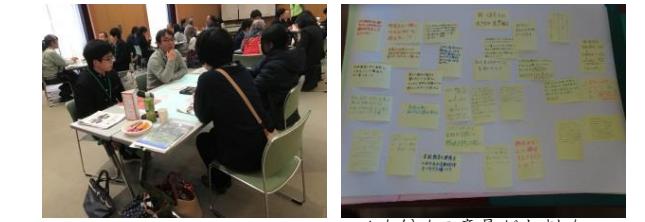


はじめまして。ほくはジルティラピア。よろしくね。市役所の環境共生課にきて、1年3ヶ月。オオカナダモを食べ続け、体長も最初は2cmくらいだったけど、いまは8cmくらい！婚姻色も出ているよ！

指定外来魚ってなんだろう。。

後半は、「くまもとの自然、生きもの、生物多様性について、もっとやってみたい！もっとこうしたい！こうなりたい！！」をテーマに、ワールド・カフェという自由に意見交換をするワークショップが行われました。なんと参加者の約4割が中高生！大人のほうがどきどきしていたかもしれません。でも、緊張していたのは最初だけで、「もっと話したかった」という声も。

最後には感想や思いをふせんに書いて、いっせいに模造紙に張り出しました。「いろんな分野・世代の人や、行政の中での情報共有が必要」「学校教育との連携が必要」「生きものや自然の楽しさを知ってもらうきっかけをばらまく」「みんなで話す場をこれからも」などの意見が出ました。



↑ワールドカフェ ↑たくさん意見が出ました

今回のミニシンポジウムは初めての試み。今後もしこうした場を続けていく意識を共有する機会となりました。

江津湖のほとりから

平成27年4月から、江津湖固有の生きものを守る取組として、江津湖の生態系に悪影響を与えるおそれのある魚、「指定外来魚」を釣り上げたら、回収箱や回収いけすに入れる取り組みが始まりました。



あれから約2年。どれくらいの指定外来魚が回収されているのか…一番多く回収された指定外来魚がオオクチバスの242匹、続いてナイルティラピアの150匹となり、平成29年1月31日までで約700匹回収されました。そして、回収された魚は魚粉に加工され、肥料などに活用されています。

いつもご協力をいただいているみなさま！本当に有難うございます。江津湖固有の生きものを守るためにも、引き続きみなさまのご協力をお願いいたします。

★このコーナーでは随時回収状況や、回収の多いポイントなどをお知らせしていきます！



→回収いけす・回収箱の位置
★：回収いけす
■：回収箱

より詳しい情報は市役所HPで！



「生物多様性」って何だろう？生きものがたくさんいること？いやいや、それだけじゃない、ふか〜〜〜〜い世界が…

生物多様性には「3つのレベル」があるといわれています。1つめは、「種（しゅ）の多様性」。種というのは、たとえば「ゲンジボタル」「ヘイケボタル」というような、生物を分類する基本的な単位。つまり、「種の多様性」というのは、様々な種類の生物がいること。そして、様々な種類の生物は、お互いに「食べる・食べられる」や「花粉を送る虫と運ばれる植物」などの関係で、複雑に関わりあっています。



2つめは、「遺伝子の多様性」。遺伝子というのは個々の生物の形や性質などを決める、親から子に受け継がれる設計図のようなもの。同じ生物種であるハマグリでも模様が一つひとつ違ったり、人の顔が一人ひとり違ったりするのも、この遺伝子の組み合わせが違うから。同じ種が全て同じ遺伝子の組み合わせだったら、例えば、特定の病気が流行したら絶滅してしまうかも。様々な遺伝子の構成があるからこそ、生物種は環境の変化にも適応して生き残っていく力を持つことができるし、



また、様々な生物種が生まれるもとにもなっているとみえます。

「生物多様性」って何なんだ!?

「3つの多様性」編



3つめは、「生態系の多様性」。とっても簡単にいうと、森林や河川、干潟や海洋など、様々なタイプの自然環境があることです。生態系のタイプが違えば、そこにいる生物の種類やその生物の関係も変わります。そして、森林を源とする河川が水田を潤し、海に流れるように、生態系も互いにつながり、関係しあっています。

こうした自然の姿は、長い歴史の中でかたちづくられてきたもの。そして、地域が違えば、気候や地形…その他いろいろな環境の違いの中で、地域独特の生態系があり、生物が息づいています。

こう考えると、「生物多様性」は、単にたくさんの生きものがいること、ではなく、大切なのは、こうした自然の中の様々なレベルでの「個性（違い）」と「つながり」があるということ。

身の回りの自然は、実はここにしかない地域の個性。よく覗いてみると、曼荼羅のように複雑な世界が広がっているんです！

★次回は、「暮らしの土台」編です。

近年、野生生物の減少や生息環境の悪化が急激に進んでいます。このことは、生物多様性が失われつつあることを意味します。私たちの生活は以前と比べて便利で快適になった半面、次第に自然から遠ざかっています。そのため、動植物の存在にも無関心になり、生物多様性から受けているさまざまな恩恵には思い至りません。しかし、それらの恩恵は私たちの生存に不可欠なものなのです。

生物多様性を理解して守るためには、次の3つのステップがあります。



↑楽しい川遊び。色んな生きものにもふれるきっかけ

①自然の中で (in) 遊び親しむ ⇒ 川遊び・草花遊び・ハイキングなどを通して生物的自然への関心と感性を養う。②自然について (about) 知る ⇒ 森林観察・野鳥観察・動物調査・河川の生物調査などで動植物の生活や自然の仕組みを知る。そして、③自然のために (for) 活動する ⇒ 生息生育地の保全・植林活動・外来生物対策などへ参加する。これらの行動は、“くまもとCプラン”の基本戦略・行動計画にも盛り込まれています。さまざまな行事や活動団体などに参加行動し、豊かな生物多様性を次世代に引き継ぎましょう！



↑放置竹林管理を地域のみんなで。整備後、竹あそび

生物多様性を守るには「ふれて・知って・活動する」
熊本大学名誉教授 内野 明德氏

みんなで未来に残したい
熊本市の自然環境

「金峰山系」

「立田山」

「雁回山(木原山)」

「水前寺・江津湖」

「白川・緑川」

「有明海(干潟)」

Cプランでは、広域的な視点でみたときに熊本市の自然環境の拠点となっている重要な場所や、親しまれ、大切にされている場所の地域を「みんなで未来に残したい熊本市の自然環境」として選んでいます。

市民みんなの力で、次の世代に引き継いでいきたい場所です。

「金峰山系」「立田山」「雁回山(木原山)」「水前寺・江津湖」「白川・緑川」「有明海」一行ったことはありますか？どんな生きものがいるんだろう？どんな魅力があるんだろう？次号から紐解いていきます。

くまもといきもんノート ～1. 水辺で見られるカモのなかま～

今の時期、川や海などあちこちの水域でカモのなかまが見られます。アイガモ(アヒルとマガモをかけた食用の鳥。本当は野外にいてはいけない。)とカルガモ以外は北の国から渡ってくる冬鳥です。

江津湖でもたくさんのカモ類を見ることができます。数が多く、目につきやすいのはヒドリガモですが、よく見てみるといろいろな種類がいることに気付くでしょう。



↑ヒドリガモ 左:オス, 右:メス

数の少ない種類を見つけるのは、宝探しにも似た楽しみがあります。

カモやハトなどにパンやお菓子などを与える人を見かけますが、これはエサをもらう野生動物にも、人にも、自然環境にとっても良くないことです。適度な距離感で楽しみましょう。



↑見つけるとうれしいヨシガモ

(文・写真) 熊本博物館 学芸員 清水稔

熊本市 保存樹木探訪

市街地の緑や鎮守の森などは、その土地の歴史とともに古くから私たちの生活を見守り、良好な自然景観をつくり出すだけでなく、たくさんの生きもののすみかとなり、まちに潤いを与えてくれる貴重な財産です。



かつて夏目漱石が「森の都」と称した熊本市には、そのような先人の残した貴重な緑の財産が数多く存在していますが、都市化が進む中で巨樹や老木の管理を個人で行う事は簡単なことではなく、減少の一途をたどっています。

熊本市では、そのような名木、巨樹又は珍しい木を次の世代に引き継ぐため、一定の基準を満たしたものを保存樹木として指定し、管理の一部について助成や支援を行っています。(平成29年1月末現在246箇所609本指定)

皆さんのお住まいの町に保存樹木はありますか？次号より各保存樹木の特徴や歴史にスポットを当て、紹介していきます！